

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32622

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19139

研究課題名（和文）無歯顎高齢者のQOLを保障する補綴治療介入モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of a prosthetic treatment intervention model to ensure the QOL of the edentulous elderly

研究代表者

原 真央子（HARA, MAOKO）

昭和大学・歯学部・助教

研究者番号：80805846

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：超高齢化社会を迎えた本邦では、高齢者の低下した口腔機能を改善することによるオーラルフレイルの防止とQOLの向上は歯科医師にとって急務である。近年では義歯やインプラント等で咬合を回復することが認知症予防や健康寿命延伸に寄与する可能性が示唆されている。治療により得られる効果を、患者立脚型アウトカム評価であるOral Health Impact Profile 日本語版の49項目を大きく4つのサブスケールに分類し、グラフ化、可視化すると共に治療介入により良好な結果が得られた。咬合支持の確立が、オーラルフレイルを防ぎ、結果的にフレイル、認知症予防に貢献できるかどうか今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

超高齢化社会を迎えた日本では、高齢者の低下した口腔機能を改善することによるオーラルフレイルの防止とQOLの向上は歯科医師にとって急務である。フレイルやフレイル関連因子と口腔の関係をみた研究が近年多く行われ、歯科の果たす役割は大きい。補綴歯科治療により口腔機能低下を防ぎ、オーラルフレイルを咬合支持の確立が、オーラルフレイルを防ぎ、結果的にフレイル、認知症予防に貢献できるかどうか今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：In Japan, which has become a super-aging society, it is an urgent task for dentists to prevent oral frailty and improve QOL by improving the declining oral function of the elderly.

In recent years, it has been suggested that restoring occlusion with dentures or implants may contribute to the prevention of dementia and extension of healthy life expectancy. The 49 items of the Japanese version of the Oral Health Impact Profile, which is a patient-based outcome evaluation, are classified into 4 subscales, graphed and visualized, and good results were obtained by treatment intervention. It is a future issue whether the establishment of occlusal support can prevent oral frailty and, as a result, contribute to the prevention of frailty and dementia.

研究分野：歯科補綴学

キーワード：口腔関連QoL OHIP インプラント

1. 研究開始当初の背景

超高齢化社会を迎え、高齢者の低下した口腔機能を改善することによるオーラルフレイルの防止と QOL の向上は歯科医師にとって急務である。義歯やインプラント等で咬合を回復することが認知症予防や健康寿命延伸に寄与する可能性が示唆されている。本研究では、高齢者の無歯顎患者を対象に、従来の総義歯・インプラントオーバーデンチャー・固定性インプラント義歯による治療効果に関して、臨床的・患者立脚型アウトカムによる評価をデータベース化し比較する。現在の状態、期待できる効果を解り易く可視化する患者説明システムを使用し、高齢者により効果的に予知性の高い補綴歯科治療を提供することを目標に、健康寿命の延伸を目指す。

2. 研究の目的

高齢者の無歯顎患者を対象に、全部床義歯・インプラントオーバーデンチャー・固定性インプラント義歯それぞれの治療効果に関して、臨床的・患者立脚型アウトカムによる評価をデータベース化し比較する。現在の状態、期待できる効果を解り易く可視化する患者説明システムを使用し、高齢者により効果的に予知性の高い補綴歯科治療を提供することを目標に、健康寿命の延伸に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

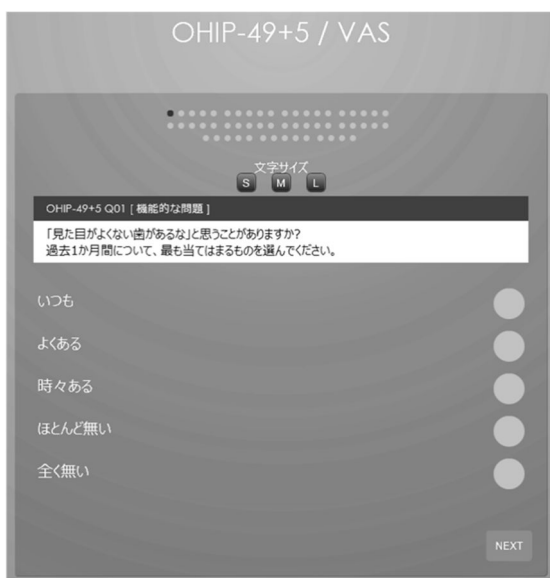


図1. iPadを用いた口腔関連QoLアンケート

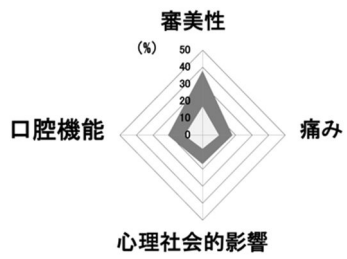
研究の対象者を昭和大学歯科病院補綴歯科の来院患者とした。選択基準は、65歳以上の高年齢者・上下片顎無歯顎もしくは両顎無歯顎とした。除外基準は、口腔顔面領域に急性な痛みや疾患がある者、自己記入式アンケートに回答困難な者、精神疾患もしくはその他の深刻な病気により著しく、身体的・精神的に制約がある者とした。口腔内診査後、研究への参加同意が得られた場合、同意書を作成し、以下の QOL に関するアンケートへの回答を求めた。補綴装置装着後 1M・3M・6M 時に、以下の項目に関するアンケート調査を行った。可能な限り左に示すように iPad を

用いた(図1)。1. 健康関連 QOL:SF36、2.

口腔関連 QOL:OHIP-J、MID、3. 治療に対する評価:治療期間・治療回数・治療費を記録した。データ解析は、ベースラインデータを基に交絡因子をコントロールし、以下の点について検討した。1. 補綴介入前と介入後の QoL の変化、2. 補綴装置の種類(グループ間)による QOL の違いについて。臨床的データと患者立脚型アウトカムから、現在の状態・期待できる効果を解り易く可視化する患者説明システムを応用し、より効果的な治療方法を多角的に分析した。

4. 研究成果

インプラントオーバーデンチャー、固定性インプラント義歯の患者が予想よりも治療の進行に時間がかかること、また被験者数が十分に収集できなかった。しかしながら、補綴歯科



治療を行うことにより、患者の口腔関連 QoL は改善し良好な結果が得られた。アンケート測定項目を 4 つに分類し、図 2 に示すように iPad 上に表示し患者に説明することができた。今後も、継続し研究をおこなっていく予定である。

図2. 可視化した患者説明システム

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 楠本友里子, 樋口大輔, 田中譲治, 三好敬三, 佐藤洋子, 松本貴志, 三田稔, 原真央子, 馬場一美
2. 発表標題 無歯顎患者におけるインプラント補綴治療法の違いが口腔関連QoLに及ぼす影響.
3. 学会等名 日本補綴歯科学会第129回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原真央子, 楠本友里子, 三田稔, 松本貴志, 樋口大輔, 馬場一美
2. 発表標題 治療部位の違いが1 歯欠損インプラント患者の口腔関連QoLの及ぼす影響
3. 学会等名 第50回日本口腔インプラント学会学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------